

北野武フラクタル三部作における自己言及性とその変化

大倉 悠

近年、ショットと呼ばれる映画の最小単位を基にした定量的な映画研究に注目が集まっている。だが、日本において定量的映画特性に着目した映画研究の対象となった作品は黒澤明、小津安二郎らに限定されている。そこで、彼らと同様国際的評価が高く、現代日本を代表する映画監督であり、監督としての出自に特異性を持つ北野武監督作品を研究対象として定量的映画研究を行った。

本研究の対象とする作品は、北野武監督作品 12 作目「TAKESHIS」、13 作目「監督・ばんざい!」、14 作目「アキレスと亀」の三作品である。井川(2012)は、これら三作品を「フラクタル三部作」と呼び、自己言及性の高い作品群であるとし、『無限可能性によって仕組まれた「フラクタル三部作」と、その数学的世界観が、『アキレスと亀』では否定される』(p.19)と定義している。

先行研究では、クローズアップが映画は人間の心の内面まで表現できる画期的なメディアであるとされており、クローズアップショットとして出現頻度を測定することで、自己言及性という尺度を定量的に扱うことが可能だと考えられる。そこで本研究では、北野映画において自己言及性が高いとされるフラクタル三部作に見られる特異性を定量的映画特性で分析し、その要因は何であるのかについて考察を行った。また、定量的映画特性はショットの時間特性はもちろんのこと、従来の定量的映画研究で扱われることがなかったシーンの時間特性に着目した。北野映画における井川の与えた無限可能性という概念を、時間特性、シーンごとの類型化をすることにより定量的に扱った。

ショット数やショット長等から自己言及性について分析を行った結果、同質なものと捉えられていたフラクタル三部作に違いがみられた。「TAKESHIS」、「監督・ばんざい!」において、他登場人物よりも北野武のクローズアップショットが多かった。これは、芸能界で成功を収める影響力の強い北野の自写が反映されたためだと考えられる。そのため日本で認知されない、影響力の弱い芸術家としての自写が反映された「アキレスと亀」では、主人公のクローズアップショットが少なくなっていると考えられる。

また、一つのシーン類型におけるシーン数はフラクタル三部作後期作品ほど減少した。フラクタル三部作は、シーン類型におけるシーン数が減少することにより、無限可能性の否定を描いたと考えられる。

(指導教員 歳森敦)